

講演会

精神分析の射程

～ 後期資本主義社会のメディア、文化、イデオロギー ～

立木 康介

京都大学人文科学研究所准教授

『メディアのなかの居心地悪さ』

20世紀以降のメディアを特徴づける要素のひとつは、物理的距離の削除ないし削減であるといえる。だが、その裏面にはつねに、ある種の「内的距離」の拡大が指摘されてきた。この二重性によって、私たちはいかなる対象のもとに置かれるのだろうか。またそれによって、他者との関係はいかなる変化を被りつつあるのだろうか。メディアに囲まれて生きる私たちが抱え込まざるをえない居心地悪さについて、ブルースト、ハイデガー、ドゥボール、アガンベンらとともに考えたい。

中野 昌宏

青山学院大学総合文化政策学部准教授

『資本のトリック／レトリック』

「近代」とは、あらゆるものが「浮遊」する時代だと言えよう。マルクスが指摘した人間の「疎外」も、ソシュールが指摘した記号の「恣意性」（指示対象からの独立性）も、実は同じ「浮遊」の別表現である。ラカンもまた、あらゆるシステムは「産みの親を忘れる」ことによってのみ成立する、と述べている。「ポストモダン」状況を経て、われわれはいまその極北に、すなわちポストフォーディズム資本主義などと呼ばれる体制のただ中にいるが、この体制の核心をなしている貨幣や資本の「独り歩き」について、さまざまな観点から議論してみたい。

日時： 2011年2月23日(水)

午後5:00～午後8:00 (開場 午後4:30)

会場： 名古屋大学 文系総合館 7階 カンファレンスホール

司会： 布施 哲 名古屋大学大学院国際言語文化研究科准教授

科学研究費補助金基盤研究(C)「政治思想としてのシュンペーター晩期資本主義社会論研究」

名古屋大学大学院国際言語文化研究科アソシエイティブ・メディア研究プロジェクト

問い合わせ：名古屋大学大学院国際言語文化研究科 布施研究室 tel. 052-789-489